海外協力隊だより・NKUNDA AMAHORO
（N…I、KUNDA…LIKE/LOVE、AMAHORO…PEACE）

第４号
２０２３年６月１２日
JICA 海外協力隊　西角祐香

この幕には、何と書いているのかな。

ルワンダの人は、よく
“Rwanda is a small country.”と言います。
ルワンダを見つけられるかな？

ルワンダは何で有名ですか？　Part1

ルワンダでは毎年４月７日から１週間を「1994 年に起こったルワンダ大虐殺の追悼週間」と定めています。この写真は、その時期に私が活動している学校で撮影したものです。学校だけでなく、役場などの公的機関、会社、お店など、国内のいろいろな場所で幕が掲げられています。

〇kwibuka は、現地語のキニアルワンダ語で to remember（記憶する）を意味します。

〇twiyubaka は、 reconciliation（和解） や renewable reconstruction（再生）を意味します。

今から 29 年前の 4～7 月にかけて、当時の人口(約 750 万人)のうち、50～80 万人以上が死亡(注 1)、約 200 万人が難民化(注 2)したと言われています。約 100 日間であまりに多くの命が失われたこと、被害者も加害者も自国民であることが世界に衝撃を与えました。虐殺後、被害者と加害者が混在する「生き残った人の国」となったルワンダで、「29 年前に起こった虐殺を忘れない」「起こったことは忘れないが、和解をして新しくつながりを築いていこう」という思いが込められています。現在、ルワンダの全人口の 65%以上が、30 歳以下(注 3)です。私が働いている中高等学校の校長先生は、直接虐殺を経験していない世代に過去を伝えていくことの大切さを話してくれました。

現在、ルワンダは「Ndi Umunyarwanda（私はルワンダ人です）」を合言葉に、国づくりを進めています。学校では同じ名前の授業があり、生徒たちは人権について学んでいます。また 2001 年に変更された国旗には、青（青空と希望）、緑（豊かな農業と繁栄）黄色（平和と協調）が使われています。右上に輝く太陽には、「国民の団結や未来への明るい展望」という意味が込められているそうです。

以前、徳島県内の学校とオンラインでつないだ時に、中学１年生からこんな感想文をいただきました。「ルワンダって何だろうと思い、少しパソコンで調べてみました。すると、その画像には、たくさんの人の骨などがありました。こんな大きな事に気がついていなかった自分が恥ずかしいです。」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」ということばがあります。「知りたい」と思えば、すぐ調べることができる時代です。興味や疑問が生まれたときをチャンスと思って、ぜひいろいろなことを調べてみてください。

【次回予告】ルワンダは、何で有名ですか？（Part2）

＜もっと詳しく知りたい人へ＞(注4)

1994年のルワンダ大虐殺は、「対立する部族」間の抗争が発展し、「隣人が隣人を手にかけた」と表現されることが多々あります。どんな対立があったのでしょうか？また、一日約1万人ペースで、約100日間もの間、訓練を受けていない一般人が、近所に住む人の命を奪い続けることができるのでしょうか。一緒に歴史をたどってみましょう。

ルワンダには、３つの部族があると言われています（現在、ルワンダ政府は部族ではなく、「私はルワンダ人」というアイデンティティを奨励しています)。8～9割がフツ、1～2割がツチ、約1パーセントがトゥワだそうです。植民地化以前は、フツとツチの区別はあいまいで、おたがいに同じ言葉を話し、結婚することも可能でした。1つの家族の中に部族が混在していることは一般的で、「部族対立」というほどのものは認められなかったそうです。

1899年にドイツ、1919年以降ベルギーから植民地支配を受け、アルファベットやキリスト教といったヨーロッパの考え方がもたらされました。その中に「部族」や「征服」といった概念も含まれており、「元々ルワンダにはフツがいた。そこにツチが現れた。(容姿が比較的ヨーロッパ人に似ている）ツチは、多数派フツよりも優秀であり、その土地を支配した。」という歴史を流布しました。さらに、少数派のツチを特権階級と位置付け（当時の王がツチだったことも、あと押しとなりました)、植民地支配する側が支配しやすい社会構造をつくったのです。それでも、一般民衆の中では、相変わらずフツとツチの結婚は一般的で、友好関係を築いていました。

しかし、徐々に事態が変わります。アフリカ各国で、民主化や独立の機運が高まりはじめたのです。前述の通り、ルワンダ人口の多数派はフツです。民主化をするということは、これまで優遇されていた少数派（ツチ）の特権が薄れ、多数派（フツ）の影響力が大きくなることを意味します。冷遇されていたフツのエリート層が「今がチャンス」と息巻きました。その結果、1959～67年の間に約2万人が虐殺され、約20万人が難民化したと言われています。
その後も政治不安のたびに「ヨーロッパからもたらされた作られた歴史」を使って自らの主張を正当化する政治家が現れたり、帰国したい難民とそれを拒む政府との間で紛争があったりしました。このような状況が何年も続く中で、「やらなければやられる」という暴力を肯定するような過激な思想が少しずつ、しかし確実に広まりました。マーケットで、野菜や果物と手榴弾が並べて売られているという状況にまでなったのです。

1994年の虐殺は、そのような流れの先に起こりました。アフリカ大陸の小さな国の国内で起こった惨事を、積極的に止めようとする国も国際組織もなく、結果として多くの人が亡くなりました。「一般人が隣人を襲う」だけで、100日間でこれほどの被害者を出すことは現実的ではありません。小火器を扱えるようなプロが関わった、組織的に虐殺が行われたと考える方が自然だろう、と多くの研究者が論文を執筆しています。

調べ物をしていると、本当にたくさんの情報に出会います。今回、ルワンダ大虐殺について、「その情報を書いた人（ソース）は、専門的な知識を持っている人だろうか。人から聞いた話を右から左に流している人ではないかな。実態をよく知っている人かな。」と確認して、執筆しました。

書かれている情報を鵜呑みにするのではなく、「これって本当かな？」と立ち止まって考えることも、(難しいですが）とても大切だと思います。「この情報が広まることで、どんなことが起きるだろう。誰が得をして、誰が困るかな。」と考えてみると、一つの情報をいろいろな切り口で見ることができると思います。

＜注釈・参考文献の紹介＞　ここに書ききれなかったことがたくさん書かれています。ぜひ読んでみてください！

注1）ルワンダの虐殺から考える（東京大学学術俯瞰講義2007.6.19）　武内進一（パワーポイント資料）
注2）ルワンダの教育を知る【内戦の歴史が今に与える影響とは】(World Vision HP内記事）
注3）2022年ルワンダ国勢調査
注4）参考文献

ルワンダの紛争とエスニシティ　創られた民族？　武内進一
暴力再考　第8章 ブタレの虐殺－ルワンダのジェノサイドと「普通の人々」－　武内進一
誰がルワンダに武器を与えたのか？―NGOによる調 査資料から(特集 ルワンダ）　武内進一
政治変動と農村社会　第1章　ルワンダの政治変動と土地問題　武内進一
ルワンダ：再燃した内戦の中のツチとフツ（特集－1 アフリカの地域紛争）　佐藤章
ルワンダにおける1994年のジェノサイド－その経緯，構造，国内的・国際的要因－　餐場和彦